

ことばは生きている 2

夫 明美

2013年の夏も大変暑さが厳しいものでした。その残暑が厳しさを残す9月半ばに、筆者はハワイ語イマージョン教育を行う機関 Ka`Umeke Ka`eo、において授業見学と教員へのインタビューの機会を得ました。以前のニュースレターに「ことばは生きている」と題したイマージョン教育校見学の短いレポートを記しましたが、今回は、別の教育機関に個人的にアポイントメントを申請して訪問してきました。

一番印象的であったのは、施設が所有するフィッシュポンドを適切に保護・管理するという大きな目的の下に、小中学生による学外授業（理科）を見学させていただいた時のことです。約10人の小中学生がペアごとに施設内の小さな池をあてられ、その池の水質調査や生物の活動状態をつぶさに観察して報告するという内容でしたが、担当教員（ハワイ語で kumu といいます）が「自分たちが任された場所をきちんと観察して報告することが、他のペアへの責任を果たすこととなります。それが、クラス全体にたいして責任を果たすこととなります。そして、それがこの施設全体、コミュニティ、私たちの後輩、ひいては、次世代への責任を果たしていくこととなります」というものでした。

責任をハワイ語では kuleana といい、それまでに見聞きしたことのある単語ではありませんでしたが、私の貧弱な脳内辞書では字義通りの英訳 responsibility にとどまっていたことに気づかされる瞬間でした。自分の行いの結果が、here & now で直示的に現れること、それに対する「責任」という程度であったということでしょうか。Kumuのお言葉にはそのような直示的なものをはるかに超える含蓄がありました。ことばに携わるものとして、日々の授業では「ことばには背景があるからね」、と学生に強調している自分の理解も非常に表層的であったことを恥じるとともに、このような体感型の授業（noho papa=to dwell in one place for generations といわれています）を通じて文脈まるごとで「意味」について新しく知ることができた貴重な経験でした。

参考文献

Pukui, M. and Elbert, S. (1986). *Hawaiian Dictionary*. University of Hawaii Press.